

青森県埋蔵文化財調査報告書 第339集

獅子神遺跡

－国道454号特定交通安全施設等整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2003年3月

青森県教育委員会

獅子神遺跡

－国道454号特定交通安全施設等整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2003年3月

青森県教育委員会



調査区遠景（東から）

序

青森県内には約4,300余りの遺跡が登録されていますが、これまでに発掘調査があまり行われていない地域がみられます。新郷村もその一つで、平成13年度に、国道454号特定交通安全施設等整備事業の実施に伴い、埋蔵文化財調査センターが獅子神遺跡の発掘調査を実施しました。

この報告書は、その調査で得られた結果をまとめたものです。

調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑のほか、数点ですが、続縄文時代の土器なども出土しています。

この調査によって得られた成果が、今後の地域の歴史・文化の理解に役立つことができれば幸いです。

最後に、この発掘調査及び報告書作成にあたり、御指導、御協力をいただきました関係各位に対して、御礼を申し上げます。

平成15年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤良治

例　　言

- 1 本報告書は、平成13年度に発掘調査を実施した国道454号特定交通安全施設等整備事業予定地内に所在する獅子神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 石器の石質鑑定、「第Ⅲ章 遺跡の位置と周辺の地形・地質」の原稿執筆については、八戸市文化財審議委員 松山 力氏に依頼した。
- 3 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「田子」「八戸」「十和田」「三戸」を利用したものである。
- 4 採団の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真的縮尺は統一していない。
- 5 遺構内外の堆積土の色調観察には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編 1999)を用いた。
- 6 発掘調査及び報告書作成における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 7 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の各機関並びに諸氏から御教示、御指導をいただいた。
新郷村教育委員会、倉石村教育委員会、下村 安則、村本 恵一郎

目　　次

序	第1節 検出遺構
例言	1 堪穴住居跡……………
目次	2 土坑……………
第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査要項	3 ピット群・礫群……………
第1節 調査に至る経緯……………	12
第2節 調査要項……………	16
第Ⅱ章 調査方法と調査経過	2 第2節 出土遺物
第1節 調査方法……………	1 土器……………
第2節 調査経過……………	2 石器……………
第Ⅲ章 遺跡の位置と周辺の地形・地質……………	第V章 放射性炭素年代測定結果報告書……………
第IV章 遺構と遺物	第VI章 まとめ……………
	報告書抄録……………
	写真図版……………

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

青森県教育委員会では、毎年、開発事業者に対して事業照会を行い、文化財の保護に努めている。平成12年5月に行った事業照会で、八戸市と十和田湖を結ぶ国道454号特定交通安全施設等整備事業の一部が新郷村に所在する獅子神遺跡にかかることがわかった。

平成12年8月に文化財保護課において事前の現地踏査を行い、縄文時代の土器片を表面採集し、関係機関との協議の結果、平成13年度に当該地区の発掘調査が実施されることとなった。

第2節 調査要項

1 調査目的

国道454号特定交通安全施設等整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する獅子神遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

平成13年4月19日～平成13年6月29日

3 遺跡名及び所在地

獅子神遺跡（県遺跡番号67010）

青森県三戸郡新郷村大字戸来字獅子神11-20外

4 調査面積 2,400m²

5 調査委託者 青森県県土整備部道路課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制 調査指導員 市川金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査員 松山力 八戸市文化財審議委員（地質学）

” 小林和彦 八戸市縄文学習館副参事（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

次長 成田誠治

総務課長 西口良一

調査第三課長 木村鐵次郎

文化財保護主幹 中嶋友文

文化財保護総括主査 上野茂樹

調査補助員 木立未来・栗谷川昭子・福井流星・

山上学

第Ⅱ章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

調査に先立ち、委託により杭打作業を行い、調査の基準杭を設定した。杭は公共座標軸に合わせて、公共座標X=52271、Y=30330をO-60とした。南北方向となるX軸はアルファベットを、東西方向となるY軸は算用数字を付し、測量原点（ベンチマーク）は、杭打委託とともに、道路工事用の3級水準点から原点移動を行い、調査区内に3点設けた。

検出遺構は、原則として確認順に遺構の種類別に番号を付して精査した。セクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的に4分割ないし2分割で設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付して、ローマ数字を付した基本土層と区別した。遺構の実測図は、簡易造り方測量によって、原則縮尺20分の1で作成した。

遺構内外の遺物については、必要に応じて、縮尺20分の1ないし10分の1で実測図を作成し、それ以外については、遺構及びグリッド単位で種類別に一括して取り上げた。

写真撮影については、基本的に35ミリのモノクローム、カラーリバーサルの2種類のフィルムを使用し、必要に応じ、カラーネガ及びポラロイドカメラを併用した。

第2節 調査経過

4月19日、調査機材等を現地に搬入し、環境整備後、調査を開始した。調査区南側の崖下には国道454号が走っていること、調査用プレハブが国道をはさんで調査区の反対側に位置していることから、交通安全対策と畑への進入路の確保に努めた。また、東西に長い調査区のため、排土場所を確保が難しく、排土を土嚢袋に入れ、付近に仮置きした。

調査はB区から試掘調査を先行し、遺構の確認や広がり、包含層の有無の把握に努めた。試掘調査の結果、遺物包含層はなく、遺構も中振浮石層で確認できることから、重機により中振浮石層の直上までの土を除去することとした。除去後、順次遺構確認を進めた。

確認された遺構は少なかったものの、調査区全域からピット群、調査区西端部からは堅穴住居跡、調査区東端部からは礫群が検出された。

6月21日に、調査終了に伴い、ラジコンヘリによる遺跡の空中撮影を実施した。

6月28日から、危険箇所を埋め戻すとともに、調査区にロープを張り巡らすなど、安全対策を施し、6月29日に調査器材、出土遺物を搬出し、発掘調査を終了した。

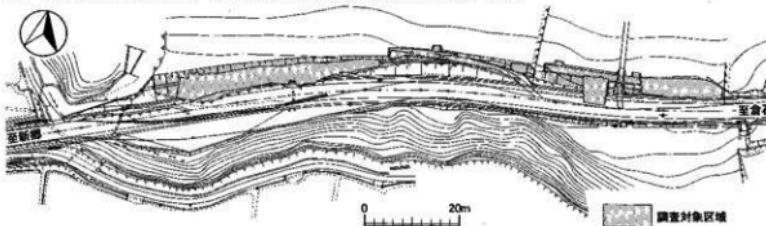


図1 調査対象区域図

第三章 遺跡の位置と周辺の地形・地質

松山 力

1 遺跡の位置と周辺の地形

遺跡は、五戸川中流部北側の大和段丘上に位置している。

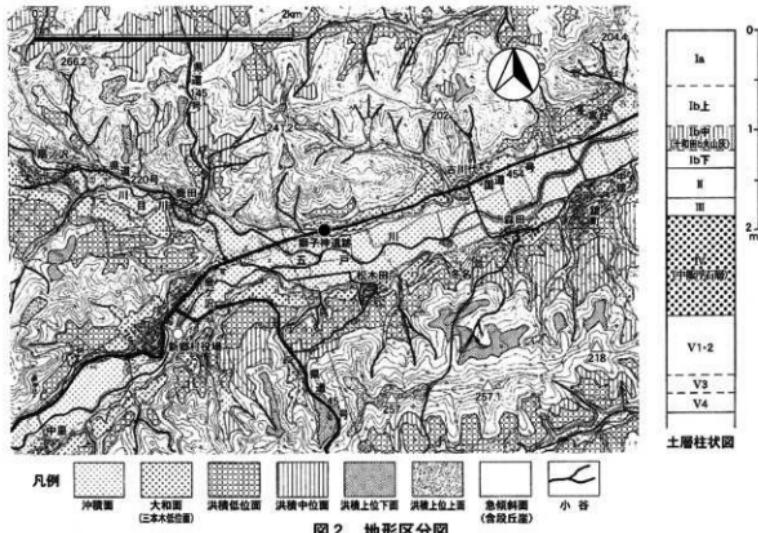
五戸川は、遺跡の西方約22kmの十和田湖東湖の湖岸から東南東へ約5kmの十和利山(標高991m)南側に源流を発し、ほぼ東北東へ流れで遺跡の東北東方約27kmで太平洋へ注ぐ河川である。

十和田湖～八甲田連峰の東側山麓地域は、広大な丘陵地となっている。この広い丘陵地を刻んで、北から奥入瀬川、その支流の後藤川、五戸川、浅水川などが並行するように東～北東へ流れ、河川の流路わきには東方ほど幅が広くなる冲積地が続いている。

後藤川と五戸川の間では幅3～7kmの丘陵が、五戸川と浅水川の間では幅3～4kmの丘陵が、東方に高度を低めながら延び、より高位の段丘ほど開析されてその平坦面は西方ほど失われている。

図2は、遺跡を中心においた東西5km、南北3.5kmの範囲の地形(面)区分図である。

遺跡の南をほぼ東北東に蛇行しながら流れる五戸川には、遺跡の南南西で西北西から下る三川目川が合流している。両川に沿う冲積地の面高さ(海拔高度、以下同様)は図の東縁で85m余、西縁ではば140mである。冲積地の幅は、遺跡付近から下流で300～350m、上流部は五戸川沿いで50～300m、三川目川沿いで50～250m程度である。図の北縁付近の西側に続く段丘群は後藤川、北縁中央部から東側に続く段丘群は倉石村中市で五戸川に合流する谷に沿うものである。また、図の南縁東側に続く段丘群は、倉石村北向付近で五戸川に合流する前田内沢に沿うものである。



沖積地の両側には、下位から洪積世最低位の大和段丘、洪積低位段丘、洪積中位段丘などの河岸段丘が断続し、高位段丘はほとんど開析されて、ところどころにその残存平坦面と思われる狭い緩傾斜面や狹長な平頂丘陵面(尾根)が残されているにすぎない。

大和段丘(中川 1968)は大和砂礫層(模式地 十和田市大和付近)を構成層とする段丘で、遺跡を含む新郷村金ヶ沢付近で、比高10m余の段丘崖を伴っている。三本木段丘群(中川 1968)のうちの低位の段丘にあたり、二ノ倉火山灰層以降の火山碎屑物をのせている。

洪積世低位段丘としたものは、大不動浮石流凝灰岩や八戸浮石流凝灰岩などの火砕流堆積物やこれにはば連続して堆積した二次堆積物の構成する段丘で、ほぼ中川(1968)の折茂段丘(三本木段丘群の中位)、大和(1989)のOPF面およびHPF面を構成する段丘にあたる。下位の大和段丘とはふつう比高10~30mの段丘崖で接するところが多いが、ところによって緩い斜面で接している。

洪積世中位段丘としたものは、大和(1989)の面区分を基に、地形図の読図によって八戸付近の高館段丘、根城段丘に相当するとと思われる段丘群を一括したものである。図の範囲では、下位の洪積世低位面と明瞭な段丘崖で接するところは少ない。一般に段丘面は、なだらかに起伏しながら沖積地に向けて緩く傾斜するところが多い。

これらの段丘群の後背地は、原地形面が著しく開析された丘陵地で、ほとんどは傾斜角が8~30°の急傾斜地となっている。この地域での最高位の原面を示すと思われる尾根部の高度は、200~265mで、いくつかの峰の標高を図2に示した。

丘陵の尾根上や中腹の高度180~210mと尾根部の高度230~260mには、ところどころに原面と思われる小規模の緩傾斜地(平坦面)が残されていて、前者を洪積上位下面、後者を洪積上位上面とした。これらは八戸付近の天狗岱段丘面にあたるものと考えられるが、確認はできなかった。

遺跡は、北側の急斜面の裾に沿って、東方1.5km周辺の倉石村古川代の集落西端から、幅100m前後で続く大和段丘の西端付近に立地していて、その南よりに国道454号線が通じている。段丘の面高さは130~140mで、南側の五戸川沖積地との間は比高10m前後の段丘崖となっている。

遺跡北側急斜面は、古川代へ北西から下る谷の出口に向かって西から半島状に突き出た、高度200~210余mの尾根を稜線とする開析された丘陵地の斜面で、遺跡直近域の背後には比高10m程度の段丘崖を伴う幅100m以内の洪積低位段丘の緩斜面が挟まれている。

2 地質の概要

遺跡周辺の基盤は、第三紀鮮新世の斗川層とされる海成層である。斗川層は主に砂岩、シルト岩、泥岩を主とする最大層厚500m程度の地層で、凝灰岩層や礫岩層を挟むところも多い。400万年~250万年前の堆積とされている。遺跡周辺の斗川層は、厚い第四紀の火山碎屑物、段丘堆積物などに覆われている。遺跡南方の浅水川沖積地の縁の段丘崖下部には、無層理の砂質シルトが見られる。

火山碎屑物のつくる地層は、八戸付近の天狗岱火山灰層相当層、高館火山灰層相当層、高館火山灰層最上部にあたる大不動浮石流凝灰岩とその再堆積層、八戸火山灰層を構成する降下火山灰層、八戸浮石流凝灰岩とその再堆積層、更新世(洪積世)末葉から完新世(洪積世)までの降下軽石・火山灰層などである。高館火山灰以降の碎屑物の給源は、ごく一部を除いて、十和田火山である。

天狗岱火山灰層相当層と高館火山灰層相当層の中・下部とは、軽石・スコリア層と褐色火山灰層とで構成されるが、遺跡の直近地域ではその露頭に乏しく、詳細な調査はできなかった。

高館火山灰層の上部に対比される大不動浮石流凝灰岩(火碎流堆積物)は、堆積に統いて削剥されてその上部に再堆積した凝灰質砂礫層とともに、折茂段丘の構成層(坪礫層 1968 中川)となっている。大不動浮石流凝灰岩の数多いC¹⁴年代測定値の大半は、24,000~27,000年前と30,000余年前の2つの年代値群に分かれ、2層準の軽石流堆積物を一括している疑いがあるが、確証はない。

八戸浮石流凝灰岩(火碎流堆積物)は、その上位に再堆積した凝灰質砂礫層とともに、大和段丘の構成層(大和砂礫層 1968 中川)となっている。八戸浮石流凝灰岩の数多いC¹⁴年代測定値は、ほとんどが12,000~13,000年前に納まっている。

更新世末葉以後の降下火山碎屑物のつくる地層は、下位から二ノ倉火山灰層、南部浮石層、中振浮石層、十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層などに分けられている。

二ノ倉火山灰層は、十和田新期火山の活動で、ほぼ12,000年前頃から9,000年前頃までに降下した軽石、スコリア、スコリア質火山砂を含む火山灰などで構成されている。遺跡周辺での厚さは3~5mで、濃い灰色、灰褐色、赤褐色~橙色系の濃色・暗色の部分が多くを占めるのが特徴である。

南部浮石層は、遺跡付近でおもに径2~5cm程度の堅い軽石の密集層で、同程度の粒度の火山角礫が混じり、間隙を粗粒砂大的軽石流や火山岩片が満たしている。厚さは1.5~2m程度で、ほとんど膠結していないので崩れやすい。層内の試料によるC¹⁴年代の測定例としては、筆者の知るかぎりでただ一つ、8,600±250年B.P.が得られている。

中振浮石層は、遺跡付近ではおもに径0.2~1cm程度の軽石の密集層で、その厚さは1m前後、膠結が進んでいないので崩れやすい。南郷村烟内遺跡ではその直上から円筒下層a式土器が多数出土している。十和田市下平遺跡(MS)では直下の土層中から大木I式土器や深郷田式土器と見られる土器を含む土器群が多数出土し、同市大和田遺跡では直下の土層中から前期初頭頃と見られる遺物が出土している。これらのことから、その降下時期は5,500~5,700年B.P.頃であろう。

十和田b降下火山灰層は、給源の十和田火山(十和田湖)から東方20~25kmの範囲内では、下部が軽石、上部が硬くしまった砂状火山灰で構成されている。遠方では火山灰層が失われ、厚さ数cmの軽石層ないしその密集塊だけが断続するか、軽石粒だけが黒色土層に散らばるだけである。降下時期は、各地の遺跡調査から弥生時代初頭~前期頃と推定されている。

十和田a降下火山灰層は、給源の十和田火山(十和田湖)西方~南方の直近地域では火碎流堆積物が主体であるが、周辺では下部の軽石層と上部の軟らかい火山灰層で構成され、給源から遠ざかるにつれて厚さ数cmのシルト状火山灰層に漸移している。町田洋ら(1981)はその噴出年は、おそらくA.D.915年であろうとしている。

3 遺跡の土層序

遺跡の層序はI層からV層の5層に分けられる。観察は、おもに深掘りされたO-58グリッドを行った。この頃に記載した各層の厚さは、O-58グリッドの50cm幅の部分をとったもので、この部分で欠如するⅢ層は隣接部分のものである。調査域全域での層厚変化は省略した。

I層は、盛り土の疑いのあるIa層と、表土にあたるIb層に分けられた。Ia層は厚さ56cm前後の黒色(10YR2/1)砂質土層で、粘性に乏しく、Ib層中の軽石と同様の堅い軽石粒がやや多量に散らばっている。Ib層は、さらに上・中・下部の3層に分けられる。上部は厚さ30~40cmの黒色(10YR2/1)砂質土層で、粘性に乏しい。表面がにぶい黄褐色(10YR5/3)~褐灰色(10YR6/1)、内部

が灰白色(10YR8/1~8/2)~浅黄橙色(10YR8/3)を呈する粒径2~7mm(最大20mm)の堅い軽石粒をやや多量に含んでいる。この堅い軽石粒は、中部に介在する十和田b降下火山灰相当の軽石塊に由来するものである。中部は厚さ23cm前後の黒色(10YR1.7/1~2/1)土層で、全体に微細な白色の鉱物粒が目立っている。目立つ白色微粒子の存在は、県南地域の縄文時代晚期~奈良・平安期の土層の特徴である。土層の下面から数cm上方には、厚さ2~4cmの範囲で上部と同じ粒径3~21mmの堅い軽石粒の密集層が断続していて、十和田b降下火山灰層の軽石部にあたる。下部は厚さ15~18cmの黒色(10YR2/1)~黒褐色(10YR2/2)土層で、上位と同じ粒径3~24mmの堅い軽石粒が散らばる。

II層は厚さ30cm前後の黒褐色(10YR2/2)土層で、にぶい黄橙色(10YR6/3)砂粒大火山灰や、粒径4~40mmのにぶい褐色(7.5YR5/4)、橙色(7.5YR6/6~7/6)、にぶい黄橙色(10YR6/4)を帶びた軽石粒が下部ほど多量に混じっている。これはIV層(中振浮石層)に由来するものである。

III層はIV層の漸移層にあたる厚さ18cm以内の黒褐色(10YR2/2~3/2)土層で、下方ほど色調が明るく、砂粒大~粒径4mmの明黄褐色(10YR7/6)~黄褐色(10YR7/8)の中振浮石層に由来する軽石粒が密に混合している。

IV層は厚さ90~100cmの中振浮石層である。色調は上方から下方へ黄橙色(7.5YR7/8)~明黄褐色(10YR6/8)から浅黄橙色(10YR8/4)~黄橙色(10YR8/6~8/8)へと色調が変化し、粒径2~12mm(最大25mm)の軽石粒が密集している。

V層は厚さ1m程度の土層で、相互に漸移的な4層に分けられる。最上位は堅い砂粒大火山灰が混じる粘性に富む黒褐色(10YR2/2)~黒色(10YR2/1)土層で、表面が橙色(7.5YR6/6~6/8)で内部が浅黄橙色(10YR8/4)~にぶい黄橙色(10YR7/4)~明黄褐色(10YR7/6)を呈する粒径5~40mmの堅い軽石が下方ほど多量に混じっている。これに続く下位層は黒褐色(10YR3/2~2/3)~暗褐色(10YR3/3)土層で、やや粘性に富み、最上位と同じ軽石粒がより多量に混じっている。これら2層の境界は凹凸に富み、合計層厚は60cm程度である。3番目の土層は厚さ15~18cmの粘性に富む砂質の黒褐色(10YR2/2)土層で、上位2層と同じ粒径3~10mmの軽石粒がややまばらに散らばっている。最下位層は粗粒砂大の火山灰が主体の暗褐色(10YR3/3)土層で、厚さは20cm程度である。粒径3~6mmの橙色(7.5YR6/6)~明黄褐色(10YR7/6)~黄橙色(10YR7/8~8/6)軽石粒が散らばっている。V層に混入する堅い軽石は、南部浮石層を構成する軽石に酷似しているが、この部位が南部浮石層の層準に相当するかどうかは掘込みが本層どまりとなったので確認できなかった。

4 引用・参考文献

- 北村 信ほか 1972 青森県の地質 青森県
- 中川 久夫 1968 南部中央地区地質調査報告書 東北農政局計画部
- 根本 直樹ほか 1998 青森県の地質 青森県
- 町田 洋・新井 房夫・森脇 広 1981 日本海を渡ってきたテフラ 科学, 51, 9
- 松山 力・木村鐵次郎 1997 煙内遺跡IV 青森県埋蔵文化財調査報告書 青森県教育委員会
- 大和 伸友 1989 五戸川流域の地形面 駒沢大学大学院地理学研究 第19号

第IV章 遺構と遺物

調査区は東西に細長いことから、全体を4つの調査区に分け、東からA、B、C、D区と呼称することとした。調査では、竪穴住居跡2軒、土坑2基、ピット群・礫群を検出し、縄文時代前期から晚期、統縄文時代の土器・石器が段ボール箱に9箱分出土した。

第1節 検出遺構

1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (SI-1) (図3~5)

[位置] D区西端部、V-89・90グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] 第2号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 遺構内堆積土中に電柱を支える線が張られており、完掘することができなかったが、東西4.9m、南北4.2mのほぼ円形に近い梢円形であると思われる。

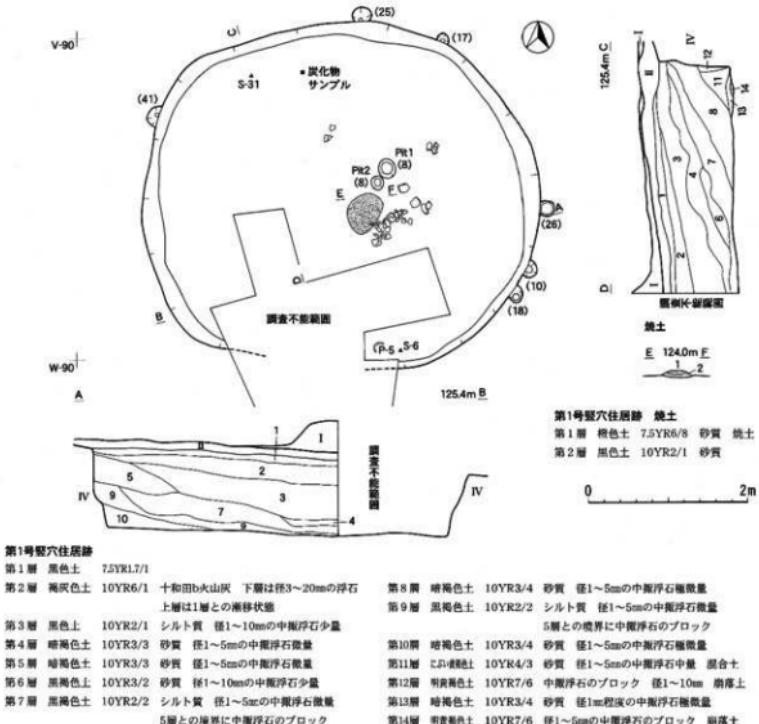


図3 第1号竪穴住居跡 (1)

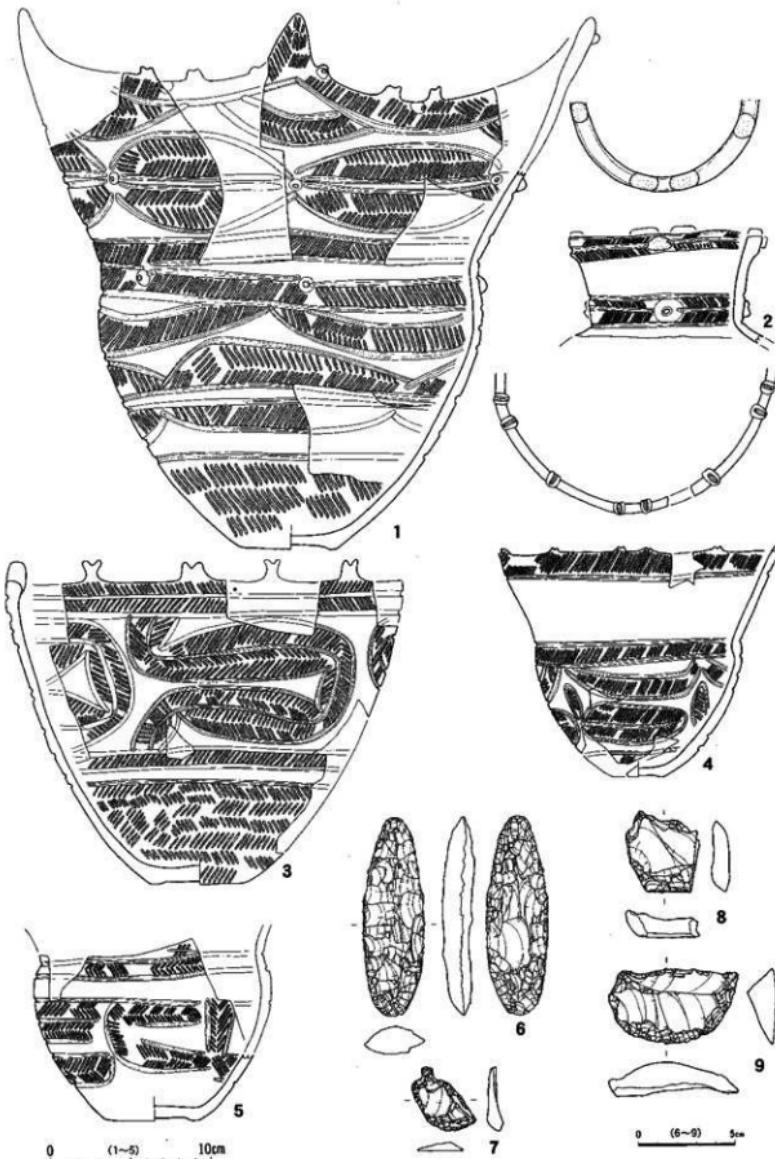
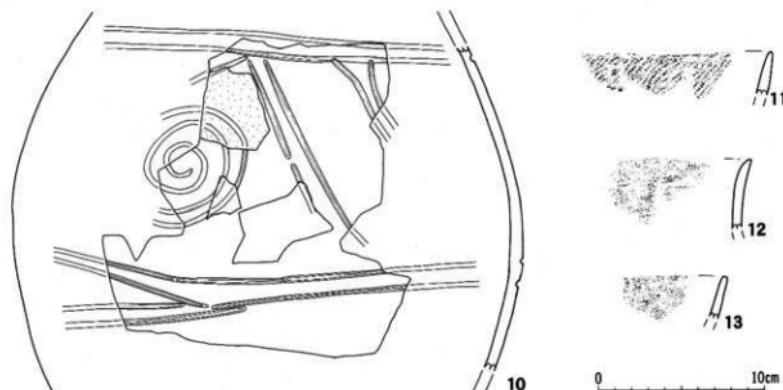


圖4 第1号豎穴住居跡（2）



遺物番号	地区	層位	器種・部位	外面文様	分類
1	SI-1	4層	深鉢	波状口縁 粘土粒 スス状痕付 弧状文様(L.R-R.L) 滑消調文(充填)	十箇内IV
2	SI-1	4層	壺	帶調文(L.R-R.L) コブ付 口唇部上面に斜面1対の突起	十箇内V
3	SI-1	4層	鉢	弧状文(L.R-R.L) 口唇部上面2個1対の突起 スス状痕付 あげ底	十箇内V
4	SI-1	4層	鉢	平口縁 角状突起 入り組状文(L.R-R.L) スス状痕付 あげ底	十箇内V
5	SI-1	4層	鉢	横位弧状文(L.R-R.L) スス状痕付 あげ底	十箇内V
10	SI-1	4層	壺	渦巻き及び斜位文(充填)	十箇内I
11	SI-1	4層	口縁	平口縁 調文(L.R) スス状痕化物付着	十箇内V
12	SI-1	3層	口縁	無文	十箇内V
13	SI-1	3層	口縁	平口縁 調文(L.R) スス状痕化物付着	十箇内V

四版番号	出土遺構	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
6	SI-1	覆土	石槍	102	32	15	51.7	珪質頁岩	S-6
7	SI-1	覆土	石匙	33	32	9	4.2	珪質頁岩	
8	SI-1	4層	不定形石器	42	38	14	20.4	珪質頁岩	S-31
9	SI-1	床直	不定形石器	39	67	18	33.0	珪質頁岩	

図5 第1号竪穴住居跡（3）

【壁・床面】壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは東側で1m、北側で90cmほどである。床はほぼ平坦である。

【炉】遺構のほぼ中央部から、52cm×40cmの範囲で焼土を確認した。

【ピット】焼土近くから2基、遺構上場周囲から遺構に付随すると思われる6基のピットを検出した。焼土近くのピットの深さは、それぞれ10cm、6cmで、そのほかのピットの深さは20cm～40cmで、堆積土は黒褐色土である。

【堆積土】黒色土と黒褐色土を主体とする。ほとんどの層に中振浮石を含み、北壁側では崩落したとみられる中振浮石がブロックで確認された。堆積土上層では十和田b降下火山灰が最厚20cmで堆積していた。

【出土遺物】第4層から土器、石槍、石匙、不定形石器が出土した。1は、口頭部に横位沈線を巡らして区画帯を構成している。口縁部文様帶には粘土粒を起点にして、弧状文を組み合わせて施文し

ており、全体が眼鏡状の文様構成である。胸部文様帶には、弧状文を連続した文様であり、沈線間に L R と R L を用いて縄文を充填している。2は、横位の沈線間に粘土粒と縄文を施文している。口頬部が内反する4と5、口唇部が内湾する3の形状がみられる。文様は、入り組み状文様の3・5と弧状文様の4の2種類の文様が存在する。11・13は縄文、12は無文の土器である。10は、二条の横位沈線を巡らして区画帶を構成し、内部に斜位と渦巻き文様を施文している。十腰内I式と思われる。文様等から、1～5、11～13は十腰内V式と思われる。また、炭化物の放射性年代測定の結果は第V章を参照のこと。

〔小結〕出土遺物から縄文時代後期後葉期と思われる。

第2号竪穴住居跡（SI-2）（図6）

〔位置〕D区西端部、U・V-89・90グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕第1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕第1号竪穴住居跡に南側を切られているため不明であるが、東西3.4m、南北3mのほぼ円形を呈するものと思われる。

〔壁・床面〕壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは30cmほどである。床は多少凹凸を示すが、ほぼ平坦である。

〔炉〕確認できなかった。

〔ピット〕東西の壁近くからそれぞれ1基ピットを確認した。配置から柱穴と考えられる。そのほかに床面からピット3基を確認した。規模は、ピット1が88cm×50cm、深さ20cm、ピット2が80cm×68cm、深さ44cm、ピット3が48cm×40cm、深さ36cmである。本遺構との関連は不明である。

〔堆積土〕黒色土と黒褐色土を主体とする。ほとんどの層に中振浮石を含み、北壁側では崩落したとみられる中振浮石がブロックで確認された。

〔出土遺物〕堆積土中から土器、石匙1点、不定形石器2点、磨製石斧1点が出土した。1は、注口が上を向き、口縁部が欠損している。横位沈線で区画し文様帶を構成し、入組文を施文、文様の起点に粘土粒を貼り付け、L R と R L を用いて磨消縄文（充填）を施文している。注口と本体が欠損しているため、アスファルトで補修をおこなっている。文様等から、十腰内V式と思われる。また、炭化物の放射性年代測定の結果は第V章を参照のこと。

〔小結〕出土遺物から縄文時代後期後葉期と思われる。

2 土坑

第1号土坑（SK-1）（図7）

〔位置〕C区中央部T-88・89グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

〔形態・規模〕東西1.2m、南北1.2mの円形を示す。断面はフラスコ状である。

〔堆積土〕黒色土を主体とし、壁際に崩落した中振浮石のブロックがみられる。

〔出土遺物〕堆積土中から縄文土器が数点出土したが、細片のため図示しなかった。

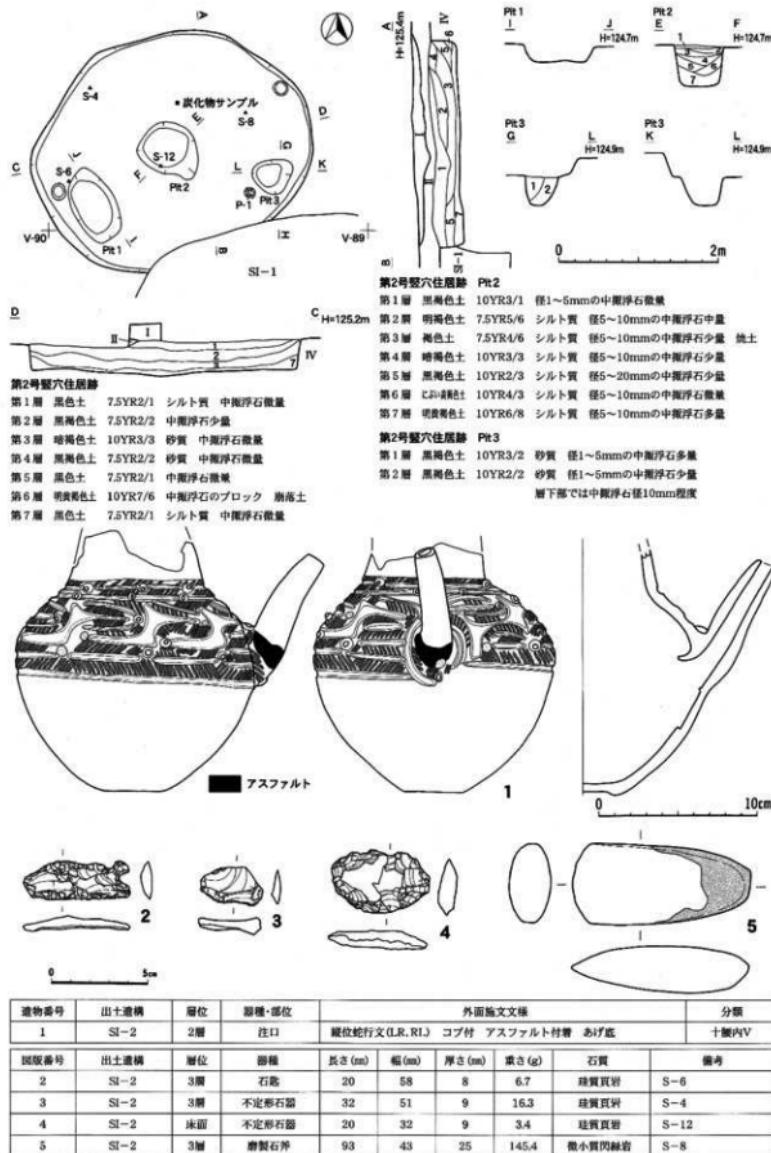


図6 第2号堅穴住居跡

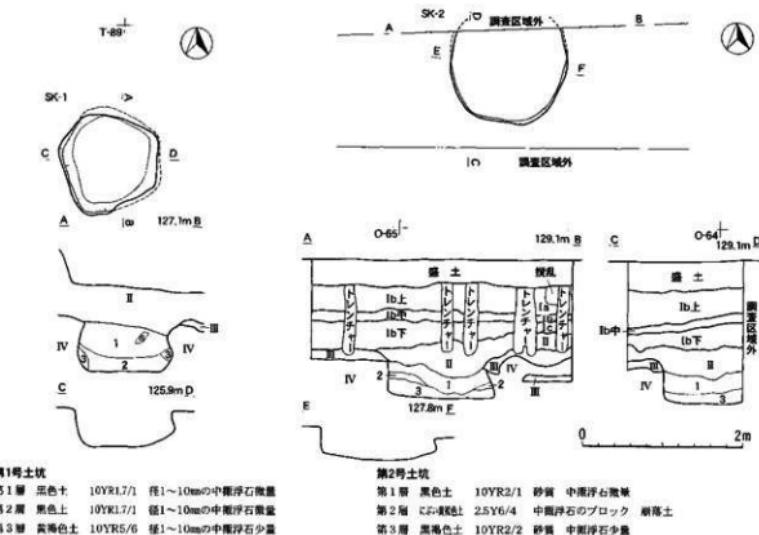


図7 第1号・第2号土坑

第2号土坑 (SK-2) (図7)

- 【位置】D区西端部N-64グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。
- 【形態・規模】北側が調査区域外となるため形態は不明であるが、調査した範囲からは直径1.45mの円形になるものと思われる。断面は下部が若干ふくらむフ拉斯コ状である。
- 【堆積土】黒色土を主体とし、壁側に崩落した中粗浮石のブロックがみられる。
- 【出土遺物】出土しなかったが、形態から縄文時代のものと思われる。

3 ピット群・礫群 (図8)

調査区域全体から検出されているため、各区毎に記述する。

A区

- 【位置】調査区東側のM~O-39~47、第IV層上面で礫群とピット群を確認した。
- 【形態・規模】ピット群は円形・椭円形を呈するものが主体を占め、長軸が25~136cm、短軸が22~76cm、深さが6~115cmに分布する。礫群は大小様々な礫が出土した。図示しなかったものもあるが、重さは120g~52.7kg、大きさは直径10cm~62cmである。石質は凝灰岩を主体とし、安山岩が含まれる。配列に規則性は認められなかった。
- 【堆積土】ピット群の堆積土は1~3層に分層される。黒褐色土・暗褐色土を主体とし、いずれにも中粗浮石を含んでいる。

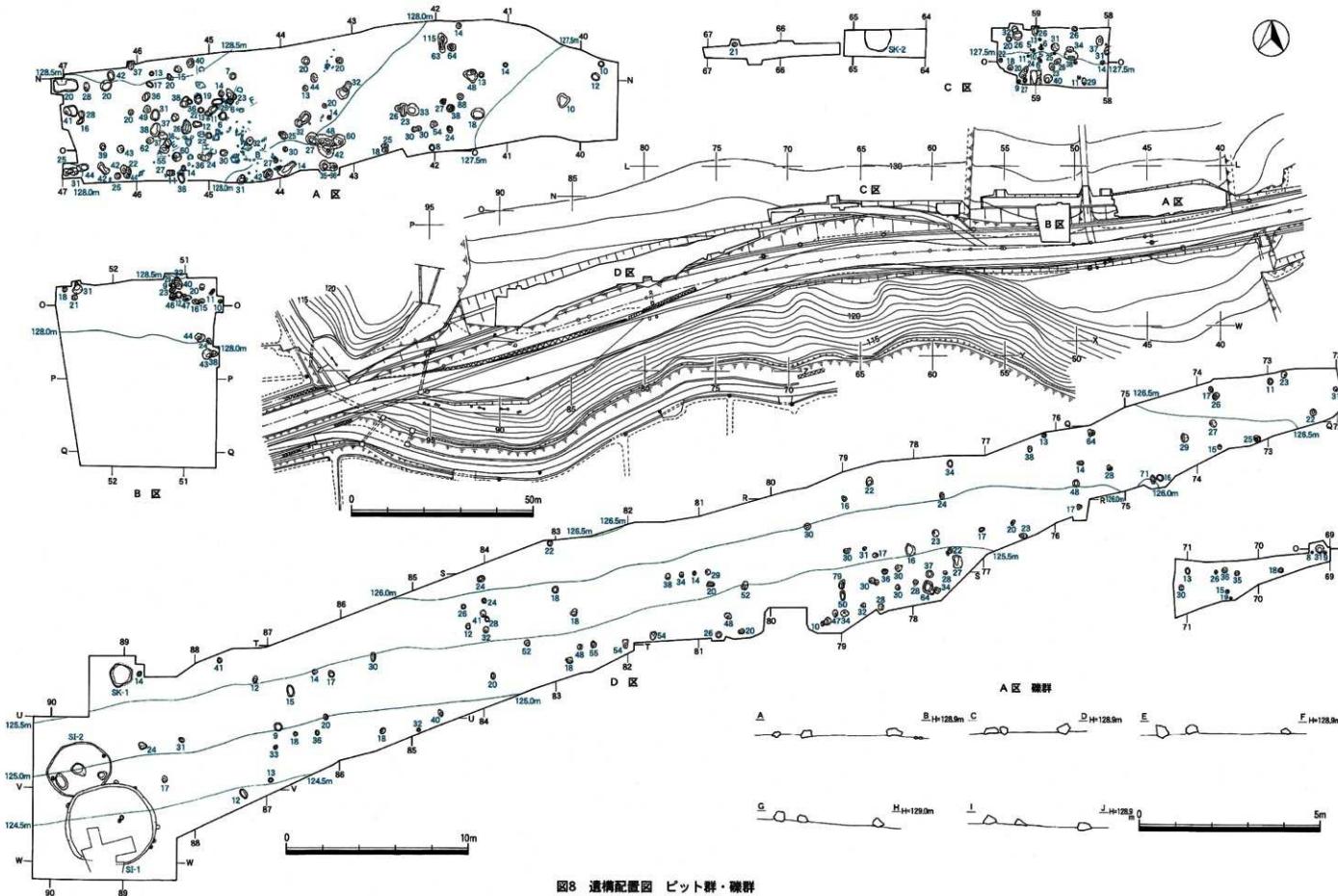


図8 遺構配置図 ピット群・礫群

【出土遺物】ピット内から遺物の出土はなかったが、O-45グリッドから土器（図9-1）が出土している。

B区

【位置】調査区中央のM～O-50～52、第IV層上面で確認した。

【形態・規模】円形・梢円形を呈するものが主体を占め、長軸が20～56cm、短軸が18～48cm、深さが10～47cmに分布する。

【堆積土】堆積土は1～3層に分層される。黒褐色土を主体とし、いずれにも中振浮石を含んでいる。

【出土遺物】ピット内から遺物の出土はなかった。

C区

【位置】調査区中央のM～O-58～59、O-66、第IV層上面で確認した。

【形態・規模】円形・梢円形を呈するものが主体を占め、長軸が16～80cm、短軸が16～52cm、深さが9～40cmに分布する。

【堆積土】1～2層に分層される。黒褐色土・黒色土を主体とし、いずれにも中振浮石を含んでいる。

【出土遺物】ピット内から遺物の出土はなかった。

D区

【位置】調査区西側のM～V-69～89、第IV層上面で確認した。

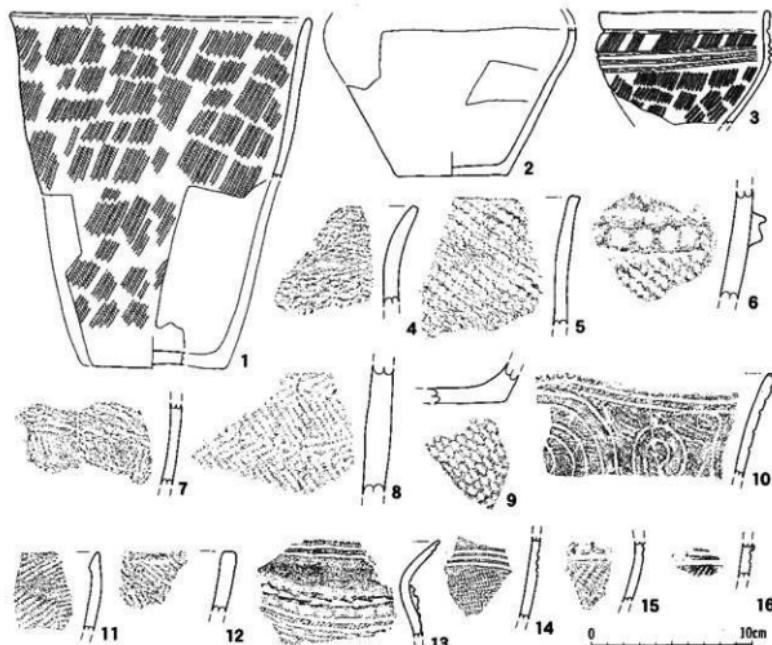
【形態・規模】円形・梢円形・不整梢円形を呈するものが主体を占め、長軸が12～74cm、短軸が12～62cm、深さが8～79cmに分布する。

【堆積土】1～3層に分層される。黒褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とし、いずれにも中振浮石を含んでいる。

【出土遺物】ピット内から遺物の出土はなかった。

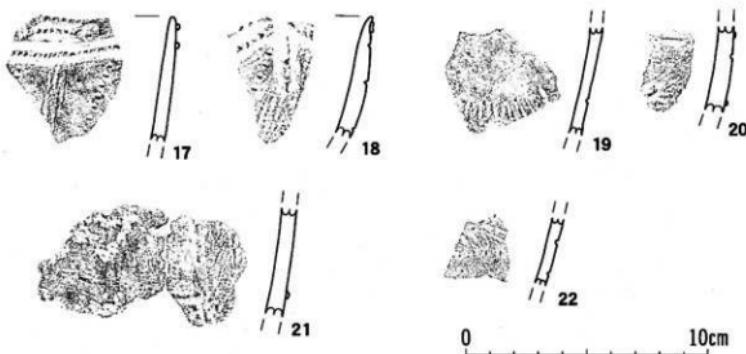
[小結]

ピット群については、形態や配置などに規則性がみられないことから、機能については不明である。ピット内から遺物は出土せず、周辺から土器が少量出土しているだけで、ピット群が構築された時期についても不明である。ただ、礫群はピット群に伴うものと考えられ、周辺から出土した土器から縄文時代後期と考えられる。

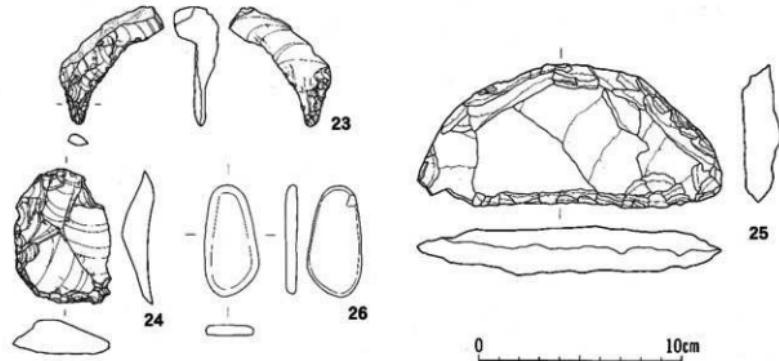


遺物番号	出土位置	層位	器種・部位	外表面文様	分類
1	N-43-44	Ⅲ層	深鉢	平口縁 LR 叉ス状陶化物付着	中期末～後期初
2	O-45	Ⅲ層	束	無文 被表皮は平滑な調整	後期
3	N-42	Ⅲ層	鉢	平口縁 横位の沈縫 二個一対の粘土粒 LR	晚期
4	Q-75	Ⅰ・Ⅱ層	口縁	平口縁 RLx 織維混入	前期
5	Q-78	Ⅲ層	口縁	平口縁 被表皮 織維混入	前期
6	O-75	Ⅲ層	口縁	横位の粘土粒の上面に指紋压痕 RLR 織維混入	前期
7	P-72	Ib上層	口縁	絶条体 RL 織練混入	前期
8	表模	網		LR・RL羽状織文	中期
9	S-85	Ⅲ層	底	底面に擦擦	中期
10	表模	口縁		波状口縁 瓢箪部に斜み 滴垂文様 磨消焼文(充填) RL	後期
11	W-88	Ⅲ層	口縁	平口縁 LR 内面は平滑	後期
12	T-88	Ⅲ層	口縁	平口縁 RL	後期
13	表模	口縁		平口縁 横位の連続鈎突と横位沈縫	晚期
14	M-43	Ⅲ層	口縁	横位沈縫 LR	晚期
15	P-72	Ib上層	口縁	横位の沈縫 二個一対の粘土粒 LR	晚期
16	O-75	Ⅲ層	口縁	横位の沈縫 二個一対の粘土粒 LR	晚期

図9 遺構外出土遺物 (1)



遺物番号	出土位置	層位	部位	外面施文様	分類
17	O-74	I-II層	口縫	二条の横位粘土紐、上面に斜み 三角形逆続刺突 繩文	統繩文時代
18	P-74	Ⅲ層	口縫	波状口縫 横位・横位の粘土紐 當消繩文(先島) 三角形逆続刺突	統繩文時代
19	O-73	I層	口縫	三角形逆続刺突 繩文(RL)	統繩文時代
20	P-72	II上層	口縫	横位の粘土紐 逆続刺突	統繩文時代
21	P-72	II上層	刷	縦・横位の粘土紐 繩文(RL) スス状模付	統繩文時代
22	P-73	I-II層	刷	横位の逆続刺突 繩文(RL)	統繩文時代



回収番号	出土位置	層位	基種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
23	W-89	Ⅲ層	石鏟	59	51	22	14.7	珪質頁岩	
24	P-74	Ⅲ層	不定形石器	66	48	17	41.2	珪質頁岩	
25	T-78	I層	半円状扁平打製石器	152	69	22	250.7	顯灰岩	
26	T-78	I層	石製品	55	27	6	10.6	珪質頁岩	

図10 遺構外出土遺物（2）

第2節 出土遺物

1 土器（図9・10）

本項では遺構外から出土した土器をまとめた。
本遺跡の遺構外から出土した遺物は、調査区の全体に散在しており、特に縄繩文時代の遺物は、P-72・73のグリッドに集中して出土した。
土器は、縄文時代前期～縄文時代の時期であり、各時期ごとに分けて記載する。

縄文時代前期（4～7）

すべて破片資料である。口縁部は口頭部が内反し平口縁を呈する。胎土に纖維を混入している土器が多い。図9-6は、口頭部に横位の粘土紐を巡らして区画帯を構成しており、粘土紐の上面に連続の指頭圧痕を施文している。口縁部文様は、図9-5が複節、図9-7が絡条体を横位に回転して施文している。内面は平滑の調整である。文様施文等から判断して、縄文時代前期中葉の円筒下層a式に該当する時期と思われる。

縄文時代中期（1・8・9）

図9-1は、平口縁で口唇部寄りが内反する深鉢形であり、縄文を横位に回転している。器外面にスス状炭化物が付着している。図9-8は羽状縄文、図9-9は底面に網代痕を有する土器である。文様施文等から判断して、図9-8は円筒上層系の時期である。図9-9は縄文時代中期末葉～後期初頭の時期に該当すると思われる。

縄文時代後期（2・10～12）

図9-2は、底部から胴部にかけての壺形を呈する土器と思われる。図9-10は、口頭部が内反する波状口縁を呈する。文様は波状口縁の垂下部に縦位の渦巻文様を施文しており、磨消繩文（充填）を施文している。図9-12は縄文のみを施文した土器であり、単節のL R・R Lを横位に回転している。図9-11は、口唇部の裏面が内傾したつくりであり、器外面にはスス状炭化物が付着している。時期は、図9-10が十腰内I式、図9-11・12が後期末葉の十腰内V式に該当すると思われる。

縄文時代晩期（3・13～16）

図9-13は、口頭部が内反し、平口縁を呈する壺形土器である。口頭部のくびれ部に横位沈線を巡らし、区画帯の内部に連続刺突を施文している。図9-3は、口頭部が内反し平口縁を呈する、小型の鉢形である。口頭部と胴部の張り出し部に横位沈線を巡らしており、胴部は二個一対の粘土紐を貼り付けている。文様の主体は、平行沈線を施文し、二個一対の粘土粒を貼り付けているものである。文様施文等から、縄文時代晩期末葉の大洞A'式に併行すると思われる。

統繩文時代（17～22）

形状は口唇部が内湾し、波状口縁と平口縁を呈する鉢形土器と思われる。図10-2は、波状口縁の頂端部が二股に分かれ、図10-1は、口唇部上面に連続の刺突がみられる。口縁部文様帶には、細い粘土紐（両端にナデがみられる）を縦位・横位に貼付、上面に連続の刺突を施文している。なお、

粘土紐の間には、山形状の文様構成（磨消縄文）がみられ、文様帶にそって三角形の連続刺突を施している。胴部文様帶には、口縁部文様帶と同様に粘土紐と連続刺突を用いて施文している。文様施文等から判断して、後北C・D式と思われる。

2 石器（図4-6～9、図6-2～5、図10-23～26）

出土した石器は、遺構内から8点、遺構外から4点である。器種毎に述べる。

図4-6は石槍である。第1号竪穴住居跡の覆土から出土した。長さが102mm、幅32mm、厚さ15mm、重さ51.7g、木葉形で、尖頭部、基部ともに丸みを帯びている。全面に調整が施されているが、尖頭部の方がやや厚手になっている。石質は珪質頁岩である。

図10-23は石錐である。遺構外からの出土である。つまみ状の頭部と錐部が区別できる。頭部は原石面がそのまま残り、特別な成形は施されていない。錐部は長さ11mm、幅9mmで、断面形は菱形に近い形をしている。相対的につまみ部が大きく、錐部が短い。石質は珪質頁岩である。

図4-7、図6-2は石匙である。図4-7は、第1号竪穴住居跡からの出土である。つまみ部はほぼ中央につけられており、刃部は曲線的なものとなっている。つまみ部の主軸と刃部が直交することから、綫型の石匙の範疇にはいるものと思われる。図6-2は、第2号竪穴住居跡からの出土である。つまみ部が右側につけられており、刃部は直線的なものとなっている。つまみ部の主軸と刃部が約45°で斜交することから、綫型と横型の中間形の石匙である。石質はどちらも珪質頁岩である。

図4-8・9、図6-3・4、図10-24は不定形石器である。5点出土し、第1号竪穴住居跡から2点、第2号竪穴住居跡から2点、1点が遺構外からの出土である。図6-4以外はいずれも、連続的な調整が施されている。図4-8・9、図6-4はサイドスクレイパーあるいはラウンドスクレイパー的で、側縁全体に調整が施されている。図10-24はエンドスクレイパーで、先端部がおもに調整されている。図6-4は、使用痕のみが観察された。石質はすべて珪質頁岩である。

図6-5は磨製石斧である。第2号竪穴住居跡の堆積土中から出土した、定角式の磨製石斧である。刃部から全体の3分の2ほどがよく研磨されており、基部から3分の1のところから敲打痕が残る。刃部には使用時のものと思われる刃こぼれが見られる。石質は微小質閃綠岩である。

図10-25は半円状扁平打製石器である。遺構外からの出土である。全体を打ち欠いて作り出している。石質は凝灰岩である。

図10-26は石製品と思われる。遺構外からの出土である。石質は珪質頁岩で、おそらく、板状に割れた素材を扁平になるまで磨いて作ったものと考えられる。側縁は山形になるように研磨・整形されている。

第V章 放射性炭素年代測定結果報告書

青森県埋蔵文化財調査センター

様

(株)地球科学研究所

〒468 名古屋市天白区植田本町1-608

TEL052-802-0703

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

14C age (y BP)	: 14C 年代 "measured radiocarbon age" 試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。 半滅期はリビーの5568年を用いた。
補正14C age (y BP)	: 補正14C 年代 "conventional radiocarbon age" 試料の炭素安定同位体比 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定して試料の炭素の同位体分別を知り $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。 試料の ^{13}C 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。 層年代を得る際にはこの年代値をもつて。
$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	: 試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。 この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分率差(‰) で表現する。 $\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$ <p>ここで、$^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372である。</p>

層年代	: 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 減濃の変動に対する補正により、層年代を 算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40(3)) により約19000yBPまでの換算が可能となった。*
------------	--

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit method as published by Talamo and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993; A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法	AMS : 加速器質量分析
	Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他	: 試料の前処理、調製などの情報
------------------	------------------

前処理	acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
	acid washes : 酸洗浄
	acid etch : 酸によるエッチング
	none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material :	低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction :	骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction :	木材のセルロース抽出
Extended Counting :	Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関	BETA ANALYTIC INC. 4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155
-------------	--

C14年代測定結果

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
-------	-----------------------------------	--------------------------------------	--

Beta- 158787 2560 ± 50 -26.0 2540 ± 50

試料名 (18412) 01SHISHI-1

測定方法、期間 AMS-Standard

試料種、前処理など charred material

acid/alkali/acid

年代値はRCYBP(1950 AD.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic Acid のC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-158787

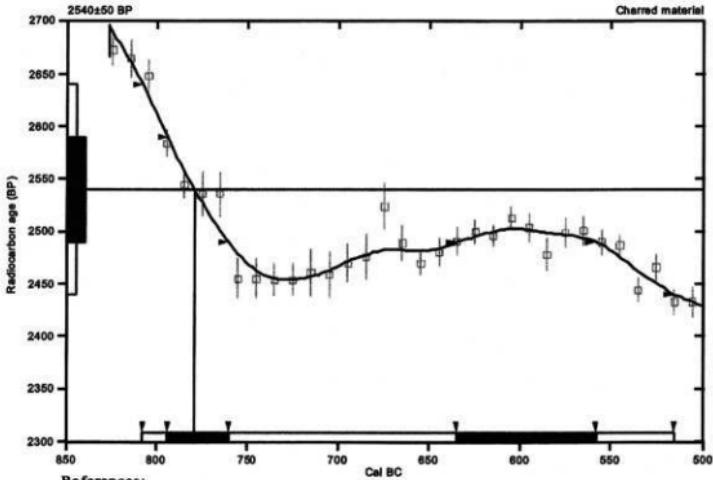
Conventional radiocarbon age: 2540±50 BP

2 Sigma calibrated result:
(95 % probability)
Cal BC 810 to 520 (Cal BP 2760 to 2460)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 780 (Cal BP 2730)

1 Sigma calibrated results:
(68 % probability) Cal BC 790 to 760 (Cal BP 2740 to 2710) and
Cal BC 640 to 560 (Cal BP 2580 to 2510)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Sauvage, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Sauvage, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematical Model

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 3167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

C14年代測定結果

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 158788	3100 ± 50	-28.1	3050 ± 50

試料名 (18413) 01SHISHI-2

測定方法、期間 AMS-Standard

試料種、前処理など charred material

acid/alkali/acid

年代はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic Acid のC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

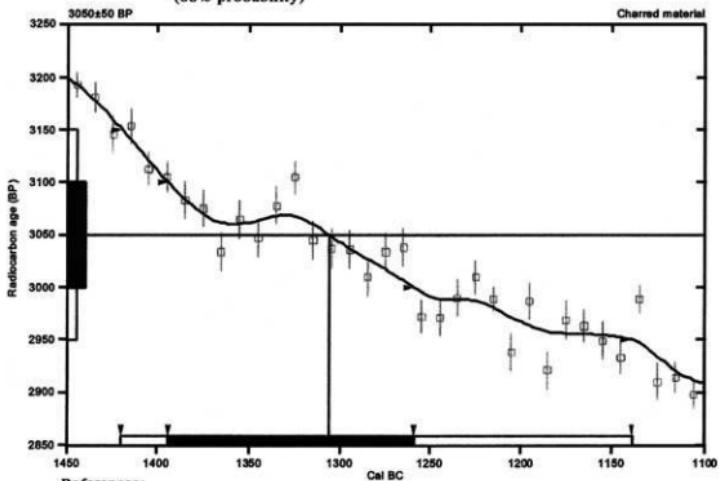
(Variables: C13/C12=-28.1:lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-158788

Conventional radiocarbon age: 3050±50 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 1420 to 1140 (Cal BP 3370 to 3090)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 1310 (Cal BP 3260)1 Sigma calibrated result:
(68% probability) Cal BC 1390 to 1260 (Cal BP 3340 to 3210)

References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998. Radiocarbon 40(3), pxi-xxii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998. Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993. Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Inc.

4985 SW 74 Court, Miami, Florida 33155 USA • Tel: (305) 667 5167 • Fax: (305) 663 0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第Ⅵ章 まとめ

1 遺跡の立地

新郷村獅子神遺跡は五戸川左岸、標高120m～140mの河岸段丘上に位置する。遺跡の現状はにくく及び長芋畑、山林である。そのため、長芋のトレーンチャーによる掘削や畠地化する際の造成の影響をかなり受けている。

2 検出遺構

縄文時代後期の竪穴住居跡2軒、土坑2基、ピット群とそれに伴う礫群を検出した。

3 出土遺物

出土した遺物はダンボール箱に9箱分である。大部分は、縄文時代前期～晚期の土器・石器で、数点の統縄文時代の土器片も出土している。

4 まとめ

獅子神遺跡は、新郷村内に所在する縄文時代の遺跡13遺跡の中で初めて本格的な発掘調査が実施された遺跡である。隣接する倉石村内では、1978年に実施された薬師前遺跡（倉石村教育委員会1997）から、縄文時代後期初頭の土器棺墓が3基検出され、中から人骨が出土するなど、貴重な資料が得られている。

遺跡の西端部から縄文時代後期の十腰内V式に属する土器が竪穴住居跡からまとまって出土し、本遺跡は縄文時代後期後葉に営まれた遺跡と考えられる。

出土した統縄文土器は、付近では出土せず、搬入されたと思われる。

遺跡東端部から確認された礫群は、円形などの規則的な配置はみられないことから配石遺構とは言い難いが、検出状況からピット群に伴う可能性が高い。周辺から出土した土器は縄文時代後期初頭に属するものであることから、この時期のものであると考えられる。

いずれにしても、限られた部分の調査であり、周辺における調査例も少ないため、不明な部分が多く、今後の調査事例の増加が望まれる。

《引用・参考文献》

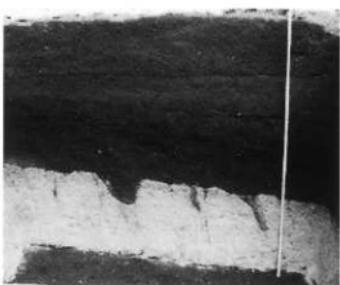
青森県教育委員会	1997 八戸久保(2)遺跡、八戸久保(3)遺跡、幸神遺跡
倉石村教育委員会	1995 八戸久保遺跡発掘調査報告書
倉石村教育委員会	1997 薬師前遺跡
倉石村教育委員会	1997 五石橋・館町遺跡
倉石村教育委員会	1998 館町II遺跡
新郷村史編纂委員会	1988 新郷村史
亀ヶ岡文化研究会	1979 新郷村畠畠遺跡の調査

報 告 書 抄 錄

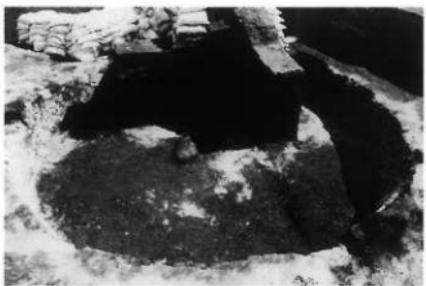
ふりがな	ししがみいせき										
書名	獅子神遺跡										
副書名	国道454号特定交通安全施設等整備事業に伴う遺跡発掘調査報告										
卷次											
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書										
シリーズ番号	第339集										
編著者名	中嶋 友文、上野 茂樹、成田 澄彦										
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター										
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701										
発行年月日	2003年3月17日										
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経						
獅子神 11-20外	青森県 三戸郡 新郷村 大字戸来 字獅子神	02450	67010	40° 28' 19"	141° 11' 19"	20010419 ~ 20010629	2,400	国道454号 特定交通 安全施設等 整備事業			
				世界測地系 2000(JGD2000)							
				北緯	東経						
				40° 28' 28"	141° 11' 06"						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項					
獅子神遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡 土坑 ピット群 礫群	2軒 2基	縄文土器 (前期～晚期) 石器 統縄文時代						



遺跡近景 (E→)



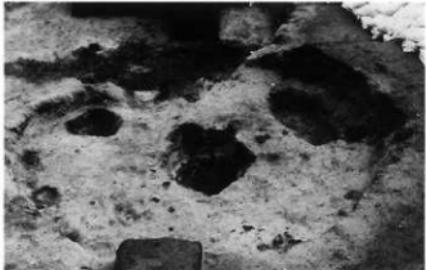
基本層序 (C区、N-58、W→)



SI-1 完掘 (N→)



SI-1 遺物出土状況 (E→)



SI-2 完掘 (N→)



SI-2 遺物出土状況

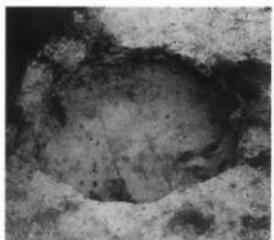


SI-1 土層断面 (N→)



調査風景

写真1 検出遺構 (1)



SK-1 完掘 (W→)



SK-2 完掘 (W→)



調査風景



A区 ピット群 完掘 (N→)



A区 ピット群 完掘 (W→)



A区 踏群 (N→)



調査風景



D区 ピット群 完掘 (W→)



調査風景

写真2 検出遺構 (2)

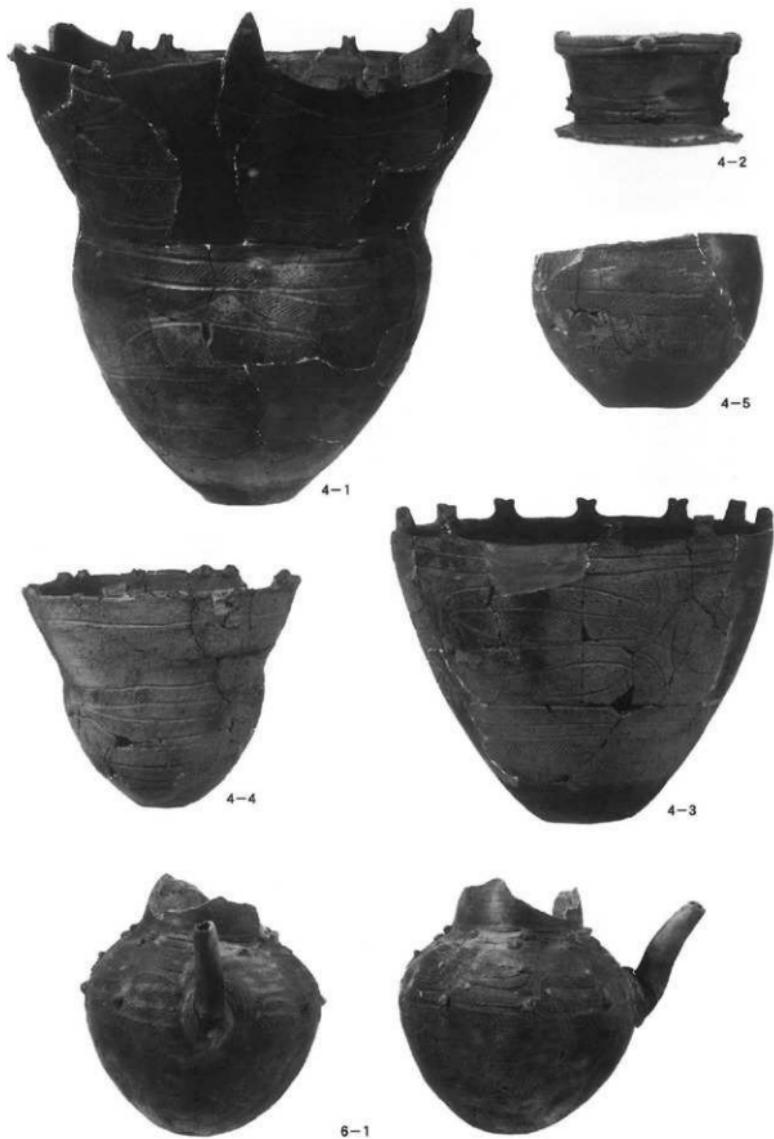


写真3 出土遺物（1）

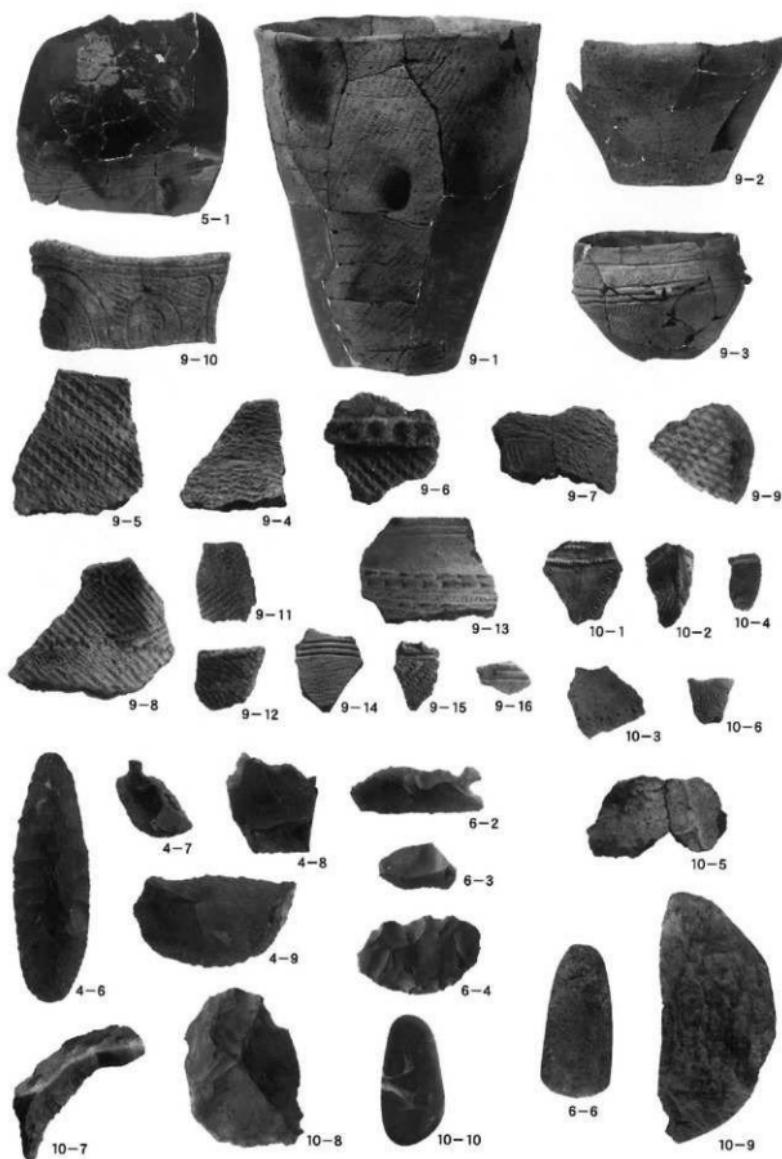


写真4 出土遺物（2）

青森県埋蔵文化財調査報告書 第339集

獅子神遺跡

—国道454号特定交通安全施設等整備事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成15年3月17日

発 行 青森県教育委員会

〒030-0801

青森市新町2丁目3番1号

電話 017-722-1111（代表）

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042

青森市新城字天田内152-15

電話 017-788-5701 FAX.017-788-5702

印 刷 所 青森コロニー印刷

〒030-0943

青森市幸畑字松元62-3

電話 017-738-2021 FAX.017-738-6753



活彩あおもり
～輝くあおもり新時代～